

ALGERNON : Well, we might trot round to Empire at ten.

JACK : Oh, no! I can't bear looking at things. It is so silly.

ALGERNON : Well, what shall we do?

JACK : Nothing.

ここでは 'Oh, no /' の繰り返しが見られるが作品全体の中に 'Oh, it's nonsense' の類が10回, 'It's absurd' の類が9回も使われている。「そんな馬鹿な /」ぐらいの単純な間投詞的表現ともとれるが、このような台詞の反復は、この作品のモチーフである nonsense, nothingness, absurdity と見事に合致している。それぞれの劇において諷刺の対象になっているはずのヴィクトリア朝の観客が、轟くような笑いを以ってこの喜劇を観たという事実、それこそまさに「喜劇」である。

(引用文中のアンダーライン等は、筆者が施したものである。)

## ワイルド書誌

1985年8月～1987年3月

梅津義宣

「Oscar Wilde の詩における色彩の象徴性 (Ⅱ)」

『尚絅女学院短期大学研究報告』33集 (1986. 12) pp 29-38

大曲陽子

「芸術家として批評家—批評家 Wilde—」

『明星英米文学』2号 (1987) pp 45-56

新倉俊一

「キザの天才 (ワイルド)」

『英語のノンセンス』, 東京:大修館書店, 昭和60, 第11章

古川弘之

「ワイルドと谷崎潤一郎—「法成寺物語」について」

『英米文学』(光華女子大学), No. 5

前川祐一

「『過去を覗く』をめぐって」

『英米文学』(立教大学) 第47号 昭和62年3月

中村真一郎

「本を読む 今日、なぜワイルドを①——『悲劇全集』毎日新聞夕刊,  
昭和62年5月8日(4)」

「本を読む 今日、なぜワイルドを②——『喜劇全集』毎日新聞夕刊,  
昭和62年5月9日(4)」

(文責 麓 常夫)